

俺が戦車道をするのは
間違っていない

武田光璃

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ガールズ＆パンツァーの世界に八幡を入れてみました！面白くない人はブラウザ
バツクをしてください！

目

次

第
2
話

1
話

21 1

1
話

前へ 1 / 1 ページ次へ

比企谷家、それは戦車道の中でも無名の家系だつた。しかし、そこの長男である比企谷八幡は戦車道に興味を持ち、色々と調べていた。だが、戦車道とは乙女の嗜み、つまり女の子だけしかしていないので、八幡はその事を知らずに5歳の時から戦車道について調べたり一人でボードゲームなどをしていた。それを見かけた両親が八幡をある場所に連れて行つた。

八幡「??お父さん、ここは?」

父「ここはお父さんの友達の家だよ。」

母「小町は私と一緒に居るから行つてきなさい。」

八幡「う、うん。」

八幡が居る場所は大きな屋敷で父親について行くと2人の女の子と一人の女性がいた。

父「久しぶりだな、しほ。」

しほ「全く、いつも唐突に来ますね。」

父がしほと呼んでいるのは戦車道の名家、西住家の当主だった。戦車道をしている人達の中では知らない人はいないほどの名家であり、当然八幡も西住家のことは調べていた。

八幡「？」

しかし目の前の人人が西住家の人は思つていなかつたのでその後ろに居る二人を見ていた。1人はあんまり感情が読めない女の子でもう1人はその女の子の後ろに居て恥ずかしそうに顔を俯かせていた。

父「それで頼みを聞いてくれるか？」

しほ「まずはどれぐらいまで理解しているのか教えて欲しいのですが？」

父「じゃあボードゲームでもしてみるか？言つとくけど八幡は相当強いぞ？」

しほ「まほ、行けますか？」

まほ「はい、お母様。」

無表情の女の子が前に出てきて、八幡が持つていたボードゲームをし始めた。このボードゲームはチエスを応用したもので戦車を動かす操縦手、玉を込める装填手、弾を打つ砲手の3つに分けておりそれを交互に動かしながら相手の戦車を全滅させた方が勝ちという、大人でも難しい遊びなのだ。

そして西住家の長女、まほは大人相手にでも勝てるほどの実力を持つていた。しほは

まほが勝つと確信していたのだが

八幡「…………えっと…………まだする？」

まほ「頼んでいいか？」

結果は惨敗。八幡の変幻自在な動きに対応することが出来ずに負けていた。

しほ「まほが負けるなんて…………」

父「八幡って1人でよくあれしてるんだけど、見てるだけでも異常さが分かるんだよな。」

??「凄い…………！」

しほ「みほ？」

まほの後ろに隠れていた女の子、西住家の次女のみほがまこの隣で盤面を見ながらそ
う呟いた。みほの中ではお姉ちゃんがいちばん強いと思っていたのだがそれを倒す、ま
してや男の子が現れたのだ。興味を持つのは当然と言えるだろう。

八幡「…………」

まほ「…………」

二人は真剣に盤面を見合い、交互に打っていたのだがまほの手がどんどんと遅くなっ
ているのに対し八幡は全く躊躇なく打つていき、最終的には八幡が勝つていた。

しほ「…………婿養子にどうかしら？」

父「いや、まだそんなこと決めるには早すぎんだろ。それにまだ連れてく所もあるしな。」

しほ「千代の所でしょ。」

父「まあな。でもしばらくはここに泊めさせてくれないか？八幡つて友達が出来てないみたいだしな……。」

しほ「それぐらいなら構わないわ。」

2人が話しているとみほが八幡の所に近付いて

みほ「あの…………名前を教えて欲しいな。」

八幡「？比企谷八幡だよ。」

みほ「八幡君…………よろしくね八幡君！私は西住みほって言うの！」

まほ「私は西住まほだ。よろしく頼む。」

八幡「えっと、西住ってあの西住？」

みほ「？他に西住って苗字の人人が居るの？」

八幡「す、凄い！！戦車道の名家の人達と会えるなんて！！……………」「ごめん！そ

んなこと知らずに手を抜いちゃって……………」

父「!?八幡、今まで手を抜いていたのか!?」

八幡「え、えつと…………あんまりいじめたらダメだと思つてたから…………」

八幡は申し訳なさそうに顔を伏せるとまほが

まほ「なら次は本氣でしてくれ。」

八幡「いいの…………？」

まほ「もちろんだ。私だけが本氣でやつているのがバカらしくなるだろう。」

八幡「じゃあ…………」

2人が始めるとき八幡の動きが先程とは違う動きになり、完膚無きまで倒された。

まほ「これほどとはな…………」

八幡「その、やり過ぎたかな…………」

まほ「どうしてそこまで強くなつたんだ？」

八幡「どうしてだろうね…………僕、本氣ですると相手の動きとか予測出来るんだ。

ほとんどがその通りに動いてくるからそれに対しても最善な打ち方が出来るだけで

……

しほ「私達とは全く違う攻め方ね。」

父「八幡はどちらかと言うと島田流じやないか？」

しほ「ならこれから西住流のやり方を教えるだけよ。」

父「随分とやる気だな？」

しほ「ええ。独学で、あんなに小さな子供が西住家を倒したんですもの。まだまだ強くなりますがからね。」

それから八幡は西住家に住むことになった。八幡は最初は戸惑つたりしたが数日が経つ頃には慣れていてみほやまほと仲良く遊んでいた。そして家政婦の菊代さんと会つて小町も一緒に住むことになった。

母「小町がお兄ちゃんと一緒にがいいつて言うからね。それに小町も戦車道をしたいつて言つてるし。」

八幡「でもまだ乗れないよね？」

母「そうね。でももし乗れるようになつたら八幡が教えてあげるのよ？」

八幡「勿論！」

それから4人でよく遊び、みほは八幡にくつ付いて離れないことにまほは拗ねて、八幡がまほのことを宥めたり、小町と一緒に戦車の中に入つてテンションが上がりと楽しく過ごして行つた。そして八幡が楽しみにしていたのが西住家の戦車道を学ぶ事だつた。自分の戦略とは全く違う戦術を聞くことが出来て喜んでいた。

しほ「八幡君、貴方の中での戦車道とはなんですか？」

八幡「カツコイイものです！自分達が考えた作戦をしたり、勝負に勝つても負けても経験になると思います！」

しほ「そうですか。西住流は撃てば必中 守りは固く 進む姿は乱れ無し 鉄の錠
鋼の心 を鉄則としています。これが王道の戦車道の戦い方です。」

八幡「でもそれじやあ戦車の強いのと弱いのではすぐに決着が着くと思ひます。」

しほ「ええ。私たち西住流はドイツ車を使つてているので。」

八幡「ドイツ車つて確か重量車でしたよね？」

八幡はそこまで言つて考へる仕草をすると

八幡「僕だつたら王道に頼らないで臨機応変に対応すると思ひます。」

しほ「…………やつぱり才能を持つてるのでしようね。」

八幡「??」

しほは八幡がその回答をすることは思つていなかつたが、5歳児がここまで考へる事が
出来るのは天性の才能としか言えなかつた。それから2年後、八幡とまほ、みほは戦車
に乗つて操縦することが出来た。小町は八幡の後ろに座つてみているだけだつたが樂
しそうにしていた。そしてしほから課題を出されたのだ。

しほ「みほとまほには課題を出します。この1年間の間に八幡君を倒してみなさい。
八幡君が1年間倒されなかつたは一度、ここを離れてもう1つの流派に行つてもらいま
す。」

みほ「え…………？」

八幡 「それってわざと負けたらどうなるんですか？」

しほ 「その時はすぐに行つてもらうことになります。」

八幡 「…………わかりました。二人とも頑張つて倒してくれ。」

まほ 「任せろ。」

みほ 「うん！八幡君のことを倒したらまだ一緒に居れるんだよね！」

それから1週間に一度、八幡VSまほ、みほで戦っていた。しかし八幡は1度も攻撃に当たることが無く、みほとまほはやられていた。本来、装填手と砲手が必要になる戦車だが八幡の戦車はかなりの魔改造をされていた。一人で全てが出来るようになされており、デメリットとしては砲弾の数が通常よりも少なくなることだけであつた。八幡はそんなデメリットを気にせず、まるで相手の動きが見えているかのように倒していたのだ。そして1年後、

みほ 「ぐす…………うううう…………」

まほ 「…………ツツ。」

八幡が1年間経つても倒されなかつた為、他の流派に行くことになつてしまつたのだ。みほとまほは泣きながら八幡の見送りをしていた。

八幡 「二人とも泣かないで。」

みほ 「だつてえ…………」

八幡「必ず会えるから！お父さんに頼んだら連れてきてもらえると思うし！」

まほ「……………いつ会えるんだ………？」

八幡「えつと……………分かんないけど会える日まで待つてて。」

父「八幡ーー。」

しほ「さ、行きなさい。」

菊代「2人のことは任せください。」

八幡「……………この3年間、とつても楽しかったです。今までお世話になります。」

た。」

八幡はそう言ってみほとまほの手を握つて

八幡「絶対に会うから！待つてて！」

そう言い、自身の戦車に乗つていった。

みほ「お姉ちゃん……いつ会えるかな。」

まほ「八幡が約束してくれたんだ。私達は待つてれば必ず来る。」

八幡「お父さん。どうしてみほ達と居れないの？」

父「別に俺は居ても良かつたんだぞ。でもしほのやつが早く連れていった方が良いつて言うからな。」

小町「次はどこに行くの？」

父「もう1つの流派って聞いてるだろ?」

小町「もしかして……島田流?」

父「そうだ。」

八幡「でも西住流と島田流って仲が悪いんじゃないの?」

父「まあ表向きはな。これは他の奴らに言うなよ? ジやないと父さんが怒られちまう

からな。」

八幡「それはいいけど…………」

八幡はやはり友達になれたみほやまほの事が気になつていた。

父「ま、会いたい時には連れて行つてやるから安心しろ。それにしても随分と改造したな?」

八幡「うん! 一人で乗れるように頑張ったから!」

八幡が乗っている戦車は日本製の10式戦車という物だつた。これは本来なら試作品だが八幡がこれがいいと聞かず、仕方なく一つだけ試作品をしつかりと作つたのだ。そして本来なら4人乗りの戦車だが中では八幡が作つた装置があり、ボタン一つで弾を発射する物、上にある紐を引っ張ると弾が装填される仕組み、そして横にあるレバーを引くことで上にある機関銃が放たれる仕組みになつていた。

八幡「けど、これを動かすのってかなり疲れるんだよね。」

父「この仕掛けは男ならではってとこもあるからな。」

欠点なのがかなりの筋力を使うため女子にはほぼ動かすことが出来ないのだ。一度小町にさせたが動かすこと以外何も出来なくて文句を言われたことがある。

八幡「…………ねえお父さん、やっぱり男が戦車道に興味を持つのはおかしいのかな？」

父「どうしてそう思う？」

八幡「だつて学校とかで馬鹿にされるし……」

八幡は学校でも戦車道の戦術を考えたりしているため、周りの生徒からからかわれていたのだ。

父「八幡、戦車道は楽しいか？」

八幡「？勿論だよ。」

父「なら良いじやないか。どれだけ周りにバカにされても最後にそれを覆せるような功績を残すことが出来ればその子達だって何も言わなくなるよ。」

小町「それに小町もやるもん！兄妹揃つて戦車道で有名になればいいじやん！」

八幡「…………そうだね。それと狭くてごめんな。」

小町「もう気にしてないから！」

父「もう着くぞ。」

八幡達が次に住む場所が見えてきた。西住家と双璧を成す島田家。ここは八幡が一度来てみたいと言つていた場所でもあつた。

八幡「ここが…………」

??「お久しぶりね。」

父「ん、千代も元気そうだな？」

千代「その子が貴方が言つていた子ね？」

父「おう。正直に言うとこのまま成長させたら西住家も島田家も勝てなくなるくらい強くなるぞ？」

千代「なら婿養子に取ればいいだけよ。」

父「お前はしほと同じことを言うな…………」

八幡「よろしくお願ひします。」

小町「よろしくお願ひします！」

千代「よろしくね。愛里寿、挨拶しなさい。」

千代がそう言うと後ろから小さな女の子が現れた。その子は手に包帯を巻かれているクマのぬいぐるみを持つていて、八幡と小町はそれに見覚えがあつた。

八幡「…………ボコ？」

小町「みほさんが好きだつたぬいぐるみだよね？」

愛里寿「ば、ボコを知つてゐるの!?」

八幡がボコの名前を呟いたのを聞いて、愛里寿は近付いてきた。

八幡「お、おう。えつと愛里寿でいいのか?」

愛里寿「島田愛里寿です。よろしくお願ひします。それよりも貴方もボコが好きなの

？」

八幡「気に入つてはいるぞ。」

小町「小町もボコのことは好きだよ！」

愛里寿「ボコ仲間が増えた〜！」

愛里寿はよほど嬉しかったのか飛び上がりながら喜んでいた。それを八幡は見ていたのだが、視線を感じて辺りを見渡すと一人の女の子がいた。

八幡「（誰だろう？）」

千代「？どうかしたの？」

八幡「いえ、女の子の姿が見えたので。」

千代「！」

父「？島田流後継者は1人じゃないのか？」

千代「そうね、確かに一人よ。」

小町「何処にいるの？」

八幡「え、あそこに…………つてあれ？」

八幡がもう一度見るともう姿がなかつた。

父「見間違えじやないか？」

八幡「おかしいな…………」

愛里寿「早く行こお兄ちゃん！」

八幡「へ？」

愛里寿は八幡の手を引いて家に入つていつた。

小町「あ！ 小町のお兄ちやんだぞ！ 取るなんて許さないから～！」

その後をすぐに小町が追つていつた。

父「ここにも3年くらい居させて欲しいんだがいいか？」

千代「ちようどいいわ。その頃には愛里寿も海外に行く予定だつたから。」

父「ん、八幡に懐きそうだよな…………大丈夫か？」

千代「それはちょっと分からぬわね…………」

八幡は愛里寿の部屋に連れてこられてボコのぬいぐるみなどを見せられていた。そして小町もそこに突撃しに来て、愛里寿と小町がボコで遊んでいる隙に八幡は家中を歩いていると

？？「やあ。」

八幡「あ、やつぱりいた。」

先程見かけた女の子が居たのだ。

八幡「君も島田流後継者かな？」

??「そうだね。だけどまだ公表はしていないよ。」

八幡「どうして？」

??「何故つて？それは私が島田流を受け継ぐか決めてないからね。私は風の気持ちを聞くよ。」

八幡「ん、よく分からん。けど無理矢理しろつて言うのもおかしいからね。」

??「君は面白いね。名前は？」

八幡「比企谷八幡だよ。」

??「八幡か。私のことはミカつて呼んでくれ。」

八幡「うん。」

ミカ「それじゃあ八幡。また会おう。」

ミカは持つていたカンテレを弾きながら歩いて行つた。

八幡「なんかよく分からない人ばつかりと会うなあ。」

それから八幡達はパーテイーに誘われて、島田家で色々とご馳走になつた。その時から愛里寿は八幡の隣に座つており、離れようとした。千代はそれを見ていて寂し

そうにしていたが、他の人達から宥められて平常運転していた。

八幡「島田流か…………」

愛里寿「お兄ちゃん、このボードゲーム出来る?」

八幡「出来るけど?」

千代「愛里寿、やつてみなさい。(どうせ愛里寿が勝つから。)」

小町「お兄ちゃん、本気でやつたらダメだよ?」

八幡「うーん…………愛里寿、手を抜かれるのと本気でさせるの、どっちがいい?」

愛里寿「本気でやつてみて?」

八幡「…………分かつた。」

二人のゲームが始まると周りにいた島田家の親戚の人達も見ていた。そして驚愕して いた。

愛里寿「…………うう…………」

八幡「ご、ごめんな!泣くとは思つてなかつた!」

愛里寿がボコボコにされていたのだ。この中で愛里寿に勝てたものは1人も居ない。

つまりこのボードゲームで今、いちばん強いのは八幡なのだ。

八幡「よしよし。よく頑張つたな。」

愛里寿「ふええええん…………」

八幡は愛里寿の頭を撫でて宥めていたが千代はそれどころじやなく

千代「（しほが彼を婿養子にしようとした理由が分かつたわ。私も冗談だつたけどこれなら…………）」

本気で八幡を愛里寿の婿養子にしようと考えていたのだ。次の日から八幡に島田流の戦い方を教え始めた千代。それに対し八幡の発想は驚かされていた。島田流は臨機応変、変幻自在な動きをしておりニンジャ戦法と呼ばれていたのだが、八幡の戦術はそれに似ているものの全くの別物だった。八幡の作戦は基本的に相手の動きを掌で動かしている所から始まる。そこまでは島田流と同じ。しかしこれは殲滅ではなく一つずつ確実に減らしていき、最終的には相手に降伏を要求するものだった。何故こんな作戦を考えたのか聞くと

八幡「えっと、基本的に僕は一人で動かしてゐるんです。殲滅することは簡単ですけど集中力がかなり持つていかれるから降伏してくれたらありがいなあ～って。」

つまりだ。八幡はあまり余計なことをしたくなくてこんな作戦を考えたのだ。これには千代も絶句した。何せまだ10歳にもなつていない、しかも男の子が簡単に殲滅出来るというのだ。それを試す為に1ヶ月後に千代が用意した10両の戦車にプロレバールの面子を集めたのだ。それを見た八幡は目を輝かせて

八幡「凄い!! こんなに強い人たちと戦えるなんて！」

そう言つた。千代は何を言つているのか理解出来なかつた。相手はプロ。それも10両の戦車、ほとんどが重量車で一人で勝てるなんて土台無理な話だ。しかし八幡は八幡「千代さん！ フィールドの地図を貰つていいですか？」
千代から地図を貰つて何かの目印を何ヶ所か付けた。
愛里寿「お兄ちゃん、それは？」
八幡「ん？ この場所を覚えてたら分かるよ。」
小町「頑張つてねー！」
八幡「おう！」
それから試合が始まつた瞬間、八幡は一気に駆け出してまずは1両の戦車を撃破した。しかし突つ込んできただけなので他の9両の戦車から攻撃をされた。それを読んでいて八幡は車体を斜めにして砲口をぐるりと回すと車体が浮き上がり攻撃を回避して、更に2両の戦車を撃破した。それまで約2分も掛からない出来事で相手チームが固まつていると、八幡はそのまま元の場所に戻つて行つた。そして3両が追いかけて来て残りの4両は分断して回り道をしていると突然横から砲撃されて1両が吹き飛び、その横にいた戦車の砲口に当たつて攻撃不可能になつた。分断していた他の2両が八幡の戦車を追いかけていた人達に状況を聞くと、追い掛けた時には既に居なかつたと言ふ。それは本来なら不可能なのだ。戦車にもスピードがあり八幡の戦車も重量車なら

他のとあまり大差ないはず。しかし八幡の戦車を見失つてしまつた。なら答えは一つだけ。八幡の戦車はスピード、攻撃に特化しているのだ。八幡自身の要望で装甲を薄くしてスピードが出るように頼んでいたのだ。故に重量車でも中量車ぐらいのスピードが出るようになつた。そんなことを知らない相手チームはパニックに陥つてどうするか話していると回り道していた2両の戦車の方に八幡が現れて砲弾を撃つてきた。しかしそれは外れて、チャンスと思つたのだろう。相手チームが2両とも撃つてきた。いや、撃つてしまつた。八幡はわざと砲弾を外して注意を自分に引き付けていたのだ。”

既に”撃つている砲弾に気付かせない為。撃たれた砲弾は、砲口を近くにある木にぶつけて折り、それに当てて回避して空から降つてきた砲弾を2両は受けた。これで3対1になり八幡は砲弾をセットしに行つた。そして3両となつた戦車達は固まつていた方がいいと判断して丸い円になつて様子を見ていた。しかし八幡はそこまで読んでおり高い丘に登るとその3両に目掛けて砲弾を撃つた。先程説明した通り八幡の戦車は紐とボタン一つで撃てるので一気に3発撃つことも出来るのだ。そして砲撃をもろに食らつた3両も白旗を上げて試合が終了した。

八幡「…………ふい＼…………」

八幡は戦車から顔を出してやり切つた感を出していた。楽しかつたという気持ちがあつたが相手チームの顔を見てそれが無くなつてしまつた。相手チームは皆、怖がつて

いたのだ。八幡の運転技術、作戦、砲撃の正確さ、全てがプロレベル。そしてまだ幼いのにだ。八幡はショックだった。自分が見てきた戦車道はみほとまほだけとしかしてこなくて、あの二人は負けても諦めなかつた。しかしあの人達は心が折れてしまつたと感じ取ることが出来てしまつたのだ。

それから八幡は戦車を乗ることが無くなつてしまつた。あの日までは。

第2話

比企谷八幡

青春とは嘘であり惡である。

青春を謳歌せし者たちは常に自己と周囲を欺き、自らを取り巻く環境のすべてを肯定的にとらえる。

彼らは青春の二文字の前ならばどんな一般的な解釈も社会通念も捻じ曲げて見せる。

彼らにかかれれば嘘も秘密も罪科も失敗さえも青春のスペースでしかないのだ。

仮に失敗することが青春のあかしであるのなら、友達作りに失敗した人間もまた青春のど真ん中でなければおかしいではないか。

しかし彼らはそれを認めないだろう。全ては彼らのご都合主義でしかない。

結論を言おう。青春を楽しむ愚か者ども碎け散れ！

?? 「あはは!! 本当に面白いねこの作文！」

八幡「…………勘弁してくれませんか？」

八幡は今、生徒会室に来ていた。戦車道を辞めてから約8年経ち、八幡は高校2年生

になつていた。そして八幡が通つてゐる大洗学園には戦車道が無いことからわざわざ選んで來たのだ。そして八幡の作文を読み上げていたのはこの学園の生徒会長、角谷杏だつた。その周りに河嶋桃、小山柚子といつた生徒会メンバーも揃つていた。

柚子「その、この作文の題材は?」

八幡「高校生活を振り返つてですかね。」

桃「何故テロリストのような作文になつてるんだ!」

八幡「これが俺の気持ちとしか…………」

杏「あー、笑つた…………私的には全然ありなんだけどね。先生達がダメつて言うから書き直してくれない?」

八幡「はあ…………それぐらいなら。」

八幡が作文を受け取ろうとすると杏は渡さないようにして

杏「まさか罰がこれだけと思つてないよね?」

八幡「へ? 今、会長はこれでもいいつて言つてくれましたよね?」

杏「それはそれ、これはこれだよ。」

杏はそう言い、八幡にとつて一番聞きたくない言葉を放つた。

杏「今年から戦車道を復活させるから手伝いをよろしくね!」

八幡「!」

八幡はそれを聞いた瞬間に昔のことがフラツシユバックした。そして
八幡「…………すいません。それだけは出来ないです。」

柚子「比企谷君…………？」

桃「比企谷、貴様会長の命令を無視するつもり——」

柚子「桃ちゃん。」

桃「なんだ——」

桃も気付いてしまった。八幡が少し震えていることに。

杏「…………どうして無理なの？」

八幡「…………俺に戦車道をさせるのは駄目なんです……もうあんな光景は見た
くありません。」

杏「…………でもね。戦車道をしないといけない理由もあるんだ。だから少しで

いいから考えてくれないかな？」

八幡「…………わかれりました。」

八幡はそう言い生徒会室を出て行つた。

杏「あれは相当なトラウマだね。」

桃「しかし会長、あの口振りからするに比企谷は…………」

杏「うん。やっぱり戦車道をしてたみたいだね。噂は本当だつたわけだ。」

噂とは西住流、島田流。その双璧を倒して2つの戦術を学び、最年少ながらプロチームを倒した男の子が居るという話だつた。しかしそれは数年前の話と言わわれて都市伝説扱いだつたのだが

柚子「それについてもよく比企谷君が戦車道をしてるつてわかりましたね。」

杏「まあたまたまだけどね。」

八幡と生徒会が出会つた理由、それは入学式にあつた。八幡は学校に向かう途中で轢かれそうになつていたうさぎを庇つて跳ねられたのだ。それで入院することになり初めてお見舞いに来たのだ生徒会だつた。そして杏が八幡が戦車道をしているのを気が付いたのは、八幡が入院している時に杏が一人でお見舞いに行くと八幡はあのボードゲームをしていたのだ。

杏「プロチームを倒した後から姿を消したつて聞いてたけど何があつたんだろうね。」

八幡「……………」

八幡は戦車道の話をされて教室に帰る氣にもなれずいつも昼ごはんを食べている場所に行き寝つ転がつた。

八幡「…………俺だつて戦車道をやりたいよ。でもあんな顔を見たら俺が異常つて嫌でもわかんだろ…………！」

あの日から八幡は戦車に乗つていなく、心を塞いでしまつっていた。それを支えていた

のは愛里寿と小町であり二人がいなければ八幡はとつくに壊れていただろう。

八幡「戦車道をしなくていいと思つたんだけどなあ…………」

八幡の戦車は島田家に預けており、千代がいつでも使えるようにしていた。そしてみほやまほとはあれ以来会つていなかつた。

八幡「元気にしてるかね…………今の俺に会う資格なんて無いし…………」

八幡の父はよく会いに行くか聞いていたが八幡はいつも断つていた。やはり戦車道辞めてしまつてから合わす顔がなかつたのだ。そこで昼休みの終了のチャイムが鳴つていたが八幡は動くつもりは無かつた。

八幡「…………寝るか。」

八幡はそのまま草むらの上で目を瞑り、眠つた。

?? 「ほら早く行かないと言われちやう！」

?? 「急ぎましよう。」

?? 「う、うん。」

3人の少女達が急いで教室に戻ろうとしているとその近くに居た八幡を見掛けた。

?? 「あそこで寝てる人がいる！」

?? 「起こしますか？」

?? 「え…………？」

「どうしたの？あ、男の子だから嫌だとか？」

「は、八幡君…………!!」

「？知り合いなのですか西住さん。」

みほ「八幡君!!!」

八幡「？（幻聴まで聞こえてきてるな。そんなにみほに会いたいのかよ俺は。）
八幡は名前を呼ばれたがこの呼び方はみほしかしないため、ありえないと思つてゐる
と、お腹に衝撃が来た。

八幡「ぐは!?」

八幡は目を開けてお腹辺りを見ると、見覚えのある顔があつた。

八幡「…………みほ？」

みほ「うん…………！うん！そうだよ！」

八幡「なんでここに…………？」

みほ「八幡君こそ、どうして会いに来てくれなかつたの？お姉ちゃんも待つてるのに

八幡「それは……」

「そこ二人！早く教室に行かないと授業に遅れちゃうよ！」

「みほさん、急ぎましよう！」

八幡「…………また会つたら話してやるよ。だから行つてこい。」

みほ「…………絶対だよ?」

八幡「ああ。」

みほはそう言うとそのまま教室に戻つて行つた。

八幡「(何でみほがここに? 黒森峰女学園に行くと思つてたんだが…………それに1年の時から居るならもつと早い時点では会つてはづ。)」

八幡は気になり携帯で黒森峰女学園のことを調べると

八幡「…………そういう事か。みほも俺と同じ感じだな。」

みほが仲間を庇つたせいで黒森峰女学園の10連覇が途絶えてしまつて色々と言われていたのだ。

八幡「さて…………授業もサボつちまつたしなあ。久しぶりに走るかな。」

八幡はそのまま学園の周りを走つて体力作りをしていると

「え、全校生徒の皆さんには至急体育館に集まつてください。」

八幡「(どうせ戦車道のムービーでも流すんだろ。俺は行かなくていいや。)」

「尚、比企谷ちゃん。来なかつた場合、どうなるか分かるよね?」

八幡「…………脅迫してよな?」

八幡は何をされるか分からないので渋々体育館に向かつた。そして後ろの方でムー

ビーを見ており、昔の気持ちが蘇ってきた。

八幡「（あの頃は純粋に楽しかったんだよな……………あの人達の顔を見てから俺は戦車に乗ると人を怖がらせてしまうつて思い始めて……………）」

八幡はそう思うと視線を外してしまった。

八幡「（やつぱりまだ駄目か……………何とかしたいんだけどな……………）」

しばらくしてムービーも終わり杏が

杏「必修選択科目で戦車道を復活させるから。もし選んでくれたら特典を付けるよ。単位3倍とか遅刻200日免除とかね。」

八幡「……………これで選ぶ奴は居ないだろ。」

八幡はさつさと帰ろうとすると

桃「比企谷！お前は何故帰ろとしている？」

八幡「オリエンテーションと終わつたんですよね？なら帰つていいはずです。」桃が呼び掛けたせいで皆から注目を浴びてしまつた。

杏「比企谷ちゃん、本当に戦車道しないの？後悔してるんじやないの？」

八幡「……………戦車道は乙女の嗜みなんでしょう？なんでそんなに俺にこだわるんです

か。」

みほ「八幡君……………戦車道、辞めたの？」

みほの発言で八幡が戦車道をしていたことが周りに知れ渡ったが、八幡は気にすることもなく

八幡「…………ああ。だからみほ達に合わせる顔が無くてな…………ずっと会えなかつた。」

みほ「でもどうして…………？八幡君、あんなに好きだつたのに。」

八幡「…………そうだな。はつきりと言えば俺が戦車道をすると怖がらせてしまう。8年前、みほ達以外と試合を初めてして思つたんだ。その人達が俺を見る目は恐怖だつた。」

八幡はそこまで言い、杏の元まで行くと

八幡「俺はこれ以上、戦車道で人を怖がらせたくない。」

杏「戦車道は嫌いかな？」

八幡「好きだよ。好きだからこそ俺が運転することで怖がつて辞めてしまう人達が出るのが嫌なんだ。」

杏「ふーん…………だから8年前突然消えたわけだね。」

八幡「？俺と会つたことありましたか？」

杏「いんや？でも噂は聞いてるでしょ。」

八幡「…………もういいですか？これ以上話すことは無いです。」

杏「本当に戦車道が好きなら一度負けたぐらいで辞めたりしないと思うよ。比企谷ちゃんは背負い込みすぎだね。」

八幡「…………失礼します。」

八幡はそう言つて体育館を出て行つた。

みほ「八幡君…………」

??「みほ、あの男の子と知り合つたのつていつなの?」

みほ「初めて会つたのは11年前かな…………3年間一緒に住んでたの。」

??「まあ、そのような事が。しかしどうして離れ離れに?」

みほ「…………二人にも説明したけど戦車道の家元つて言つたよね。私にはお姉ちゃんが居るんだけど、戦車が乗れるようになつてからお母さんに課題を出されたんだ。1年間の間に二人で八幡君を倒してみてつて。出来ないと他の家元に送るつて。」

??「じゃあさつき再会したつて事は……」

みほ「私たち二人でも勝てなかつたんだ。八幡君は本気でないと他の家元にすぐに連れていかれるつて言われてたから。」

??「じゃあ比企谷さんは西住さん達と離れてすぐに辞めてしまつたのですか。」

みほ「8年前ならそうだと思う。でも八幡君は本当に戦車道が大好きだつたんだ。女の子だけしてるつて聞いても必死に勉強してて…………」

八幡「……………分かつたような口を聞きやがつて……………！」

八幡は近くにあつた木を殴り付けて

八幡「……………上等だ。一度だけやつてやるよ。俺一人で戦車道を始めた全員を倒してから……………あの人達が思つた気持ちを味合わせてやる。」

八幡はそう呟き、ある場所に電話した。

八幡「もしもし。」

千代「……………八幡君？」

八幡「お久しぶりです、千代さん。」

千代「私に電話をしてきたつことは、そういう事かしら？」

八幡「ええ。久しぶりに一度だけすることにしました。俺の戦車、大洗学園に送つて

貰えますか？」